３．とっとり千年構想について　(新名阿津子／社会人)

（１）鳥取市の千年後の将来像について

○新名阿津子議員

私は、とっとり千年構想について質問いたします。

地球が誕生して４６億年がたちました。１，０００年前もこの土地は存在し、恐らく１，０００年後も続いていくでしょう。１，０００年という時間の中では地震や火山の活動もあるかもしれません。

その中で、山陰海岸ジオパークは、約２，５００万年前からの日本海形成に伴う多様な地形、地質、風土と人々の暮らしをテーマとするジオパークであり、２０１０年１０月に世界ジオパークネットワークへの加盟認定を受けました。私はこのことを、鳥取が地球の歴史を見るのに適した持続的発展可能な土地、大地であると世界が認めたことであるととらえております。

一方で、鳥取市は１８８９年に市制が施行され、ことしで１２３年が経過します。その間、さまざまなことがありましたが、これは４６億年の歴史から見るとほんの一瞬の出来事です。その一瞬の中で現代社会は殊さらスピードと成果が重視される時代となり、近視眼的な発想や考えにとらわれがちになってしまいます。

そこで、今回は、鳥取の未来を長期的なビジョンから語るために、５年、１０年や５０年、１００年ではなく、１，０００年というタイムスパンから考えていきたいと思います。

まずは、この鳥取市の将来、１，０００年後の姿について、お考えをお聞かせください。

以上で登壇での質問といたします。

○竹内市長

まず、とっとり千年構想というテーマといいますか、題目は非常に壮大な考え方で、後で出てきますが、ジオパークという歴史的に見ても時間のスパンの非常に長いものを考えたときに、１，０００年というのは、１，０００年そのものもそんなに長いことではないという前提があっての御質問だと思います。

まず、１，０００年先を語るというのはいきなりなかなかできないわけで、私は、やはり１，０００年前を考えてみるというのが大事だと思います。ちょうど「平清盛」が始まっておりますが、あれが大体９００年ぐらい前ですよね。１２世紀で、鎌倉幕府が１１９２年に始まる。その同じような世紀の始まりごろのことですが、その少し前になると平安時代の終わりごろという話になってくるのだろうと思います。そのころのことというのは、それほど

鳥取で顕著な話は思い浮かばないのですが、ちょうど因幡の国庁に国司として大伴家持が赴任をして歌を詠んだのが約１，２５０年前となっていますから、鳥取平野はそのころ既にある程度形があって、しかし、余り海に近い方ではなくて、今の国府町の国庁跡のあたりが恐らく安定的な役所の所在地と考えられて、そこに因幡の国庁が置かれていたのがアバウトに言って１，０００年、１，２００年前ということになるわけであります。

しかし、そこで万葉集の編さんをしたとも伝えられていますし、既にその地域が相当その当時としてはしっかりと整った農耕社会があったり、それから地域社会が存在していたということも歌からも推測できるわけであります。年の初めに地域の豪族の人たちを集めて大伴家持が国司として歌を詠んでいるということで、今と余り変わらない正月風景があったのではないかという気にもなります。

そういう地域社会、農耕社会が成り立っており、奈良の都との間でいろいろつながっていたわけでして、そういうことを考えると、１，０００年前もそう大きく今と違わない状況もあったようにも思われます。

私は、これから１，０００年先もある意味でそんなには変わらない部分があると思います。もちろん表面的に技術革新がどんどん進んで、自分の行きたいところを指定すれば、乗り物が自由にそこまで運んでくれるといった電気自動車が動いているとか、もう電気でないかもしれませんが、そういったことが起こっているかもしれません。しかし、やはりこの地は、一つの、今いう鳥取の地元の地域の皆さんがこうしてこの地に生活をして、そして生産、そして地域社会を築いて文化を生み出しているという基本的な形は変わらないのだろうと思っておるところです。

したがいまして、そうしたことのために、やはり今考えられるいろんなリスクファクターですね、例えば災害に対するリスクと、そういったことに対してはしっかり対策を立てる。そして人間の基本的な生存にかかわる衣食住みたいな点、こういった点につきましては恐らくそんなに大きく変化をしないで、これから１，０００年も続くだろうと思われます。

そういったことで、鳥取の町につきましても今の町の基盤を基本的に尊重しながら、まちづくりをその時代、時代に必要に応じて、変化も取り入れながらやっていくということを常に考えて取り組みを進めていくことが必要だと思います。

１，０００年後の鳥取市の人口がどれぐらいだろうかとか、いろいろ思いをめぐらせてみますが、余り明確な答えを出す根拠が私自身乏しいわけでありますが、６０年前のことをちょっと議論する機会があって、鳥取大火があった１９５２年ですが、調べてみるとそのとき

の鳥取市の人口は６万１，０００人だったという話をしております。というのは、大火後に合併をして、少し大きくなるということで、明治の始まったときは３万人ぐらいの鳥取市ですが、大火があった６０年前がちょうど６万１，０００人という数字になります。区域がいろいろに変わるので、人口も変わってきますけれども、私は人口の数字というよりは、きちんと人々が生活を営んでいる町として、これからも１，０００年も存続できるのがこの鳥取の地域だと、鳥取市だということは、１，０００年前を振り返ってみてどうだったかということを考えても、１，０００年間続いたものはこれから１，０００年間続く可能性も大いにあるという意味合いでもっても、必要な変化に対応することができれば、これは十分に存続を図って、市民生活を豊かにすることのできる土地であるということを申し上げて、答えとさせていただきたいと思います。

（２）鳥取市が千年続くための都市の景観と機能について

○新名阿津子議員

ありがとうございました。

重ねて質問いたします。

自然は地球の諸活動がつくり出してきたものですが、一方で、都市は人間がつくり出した文化の一つであります。世界の都市を見ますと、多様な形態があります。例えばスペインのコルドバやトレド、ドイツの中世都市でありますレーゲンスブルクなどのように世界遺産に登録されるものや、ニューヨーク、ロンドン、東京といったグローバルシティーとして世界経済の中枢に位置する都市が上げられると思います。もちろんこれら以外にも多様な都市の形態がございます。

鳥取の都市としての歴史を見ますと、鳥取城の城下町を起源とし、鳥取地震や鳥取大火をくぐり抜け、現代へと形を変えてきました。今後、鳥取が都市として１，０００年続くために、都市としてのあり方や機能、景観についてどのようにお考えをお持ちでしょうか。以上を質問といたします。

○大島都市整備部長

お答えいたします。

本市は、鳥取大火などの大きな災害を経験してまいりましたが、町をイメージしたときの久松山をシンボルとした景観は基本的に変わっていないと考えております。また、約５００年前に鳥取城が築城されて以来、若桜街道、智頭街道を通して久松山を望む、それが中心市

街地の景観を考える基本であり、１，０００年先にも変わらないものと考えております。

そのため、まちづくりにおいては、鳥取城跡周辺地区における城下町としての風格のある景観整備、久松山に向かう両街道を中心とした見通し、いわゆる「山あて景観」の保全、また、駅開通から約１００年が経過し、鳥取県のもう一つの核を担っている鳥取駅周辺地区の活気ある玄関口としての顔の保全、この３つの景観が一体のものとして意識されるべきであり、今後さらに磨きをかけていくことが大事であると考えております。

そして、まちづくりの面からは、１，０００年先を見据えて、多極型コンパクトシティーの中心市街地の二核二軸における各施設の更新、再配置、新設を行う際に、この景観の基本方針と整合させていくことで、景観面でも都市機能面でも１，０００年続く都市を実現できるものと考えております。

鳥取城跡周辺地区につきましては、平成２３年５月に設置した有識者、公募委員等から成る現本庁舎周辺地域活性化検討委員会において地域の課題を検討し、２０年後の将来に向けて、「多様な世代が住む、豊かな街なか生活の舞台」「多様な歴史、文化、景観等の資源を有する、交流の舞台」の２つの方向性を平成２３年１１月の中間報告でいただいております。また、第９次鳥取市総合計画の施策の一つである鳥取城跡観光の推進のための鳥取城跡観光推進計画素案についても今年度中に策定し、市民の皆様の御意見をいただくこととしています。

一方、鳥取駅周辺地区におきましては、平成２３年に有識者、商業者等関係者の意見をもとにした鳥取駅周辺再生基本構想に位置づけられている多機能を高度に集積した広域商圏対応型拠点の形成等の将来像を実現するための鳥取駅周辺再生基本計画を今年度中に取りまとめる予定としています。これらの計画で整備される内容につきましては、鳥取市景観形成条例、鳥取市公共サインガイドラインに合致させるとともに、鳥取市景観形成審議会に随時報告いたしまして、助言をいただきながら進めてまいります。

このことにより、景観面でも都市機能面でも鳥取市の中心市街地を１，０００年先に向けて着実に成熟させていきたいと考えております。以上でございます。

（３）ジオパークを活用した防災学習についての施策について

○新名阿津子議員

ありがとうございました。

最後に、一つ御提案申し上げます。

先ほど少し触れましたが、１，０００年という時間の中では地震や火山活動が起こる可能性も否定できません。その際に重要となるのは、日ごろからの防災、減災への取り組みであります。変動帯に位置する日本に暮らす私たちにとって、地震や火山は身近な存在であり、それらを理解する必要がありますが、その機会が十分にあるかというと、不十分であると指摘せざるを得ません。

そこで、防災、減災に関する学校教育及び市民教育でのジオパークの活用を御提案したいと思います。と申しますのも、ジオパークは地球をテーマにした自然公園であり、自然災害や防災教育においても活用することが望ましいと考えているからです。実際、霧島ジオパークでは、日ごろからの研究者とガイドのネットワークが構築されており、新燃岳噴火の際も素早い対応が行われたと聞いております。鳥取においても自然災害による死傷者ゼロを目指して、市民が自然災害や防災に関する学習機会を持ち、地球科学の研究者と密接なネットワークを持つことができるような施策が必要であり、これを進めるために、ぜひジオパークの活用をお願いしたいと存じますが、いかがでしょうか。よろしくお願いいたします。

○竹内市長

新名議員のこれまでいろいろ活躍されている分野の一つがジオパークでありまして、今の御質問はまことにもっともな御提言だと思ってお聞きしました。

ジオパークはそもそも、地質公園とも言われる場合がありますが、雲仙普賢岳の例でもよくわかるように、実は大きな災害をそこで巻き起こしてもいるわけでありまして、やはり防災と全く無縁ではないと、私はもともと無縁ではないと考えた方が自然であるように思います。ですから、ジオパークを学ぶことが防災を学ぶことと、多くの場合、そういう図式が成り立つのだと思います。

そこで、山陰海岸ジオパークについてもそういう観点から、今、地震のことなども、実は海の中を調べるよりも陸地の方とか湖沼を調べて地震の津波の形跡を見るとか、そういったことがあります。鳥取砂丘でも砂の層を見ていると、ここに火山灰があるとか、そういったことで火山噴火がそこに刻み込まれているわけで、そのように、ジオパークを学ぶことは災害について学ぶことであることが多々あるわけであります。

新名議員とその関係者の方々が先般、津波啓発チラシとか地震啓発チラシをつくられたと聞いており、また、湖山池情報プラザなどのジオパークの拠点施設に設置されているということも伺っておりますので、こうしたこともＰＲの一環に、ＰＲというか、ジオパーク学習の内容の一環に加えるなど、これからジオパークに関しては、鳥取市内の全小学校を対象と

した現地体験学習といったことも実施していくわけでありますので、学習リーフレットを作成して小学校に配布しておるわけでありますので、こうしたことに加えて、あるいはその内容の中に防災という観点、あるいは災害についてのいろいろな痕跡とか歴史とか、そういったものを含めてしっかりと防災教育につながるジオパークの学習ということを今後の取り組みの中で位置づけて、推進を図っていきたいと思います。

○新名阿津子議員

ありがとうございました。

１，０００年後といいますと３０１２年です。どのくらいの方が生きていらっしゃるのかわりませんけれども、そこから振り返ったときに、この２０１２年がいい意味でのターニングポイントとなるような市政を期待しております。

私からの質問は以上です。ありがとうございました。